

主体的に読みを深める学習指導の工夫

～子どもたちの多読につなげるために～

川端 大奨

本研究では、読みを深めるためには子どもが主体的でないと思えないと深まらないと考えている。子どもたちが「面白い」と感じることを学習に活かしていかなければ、学習意欲が向上せず主体的に読もうとするところには至らない。そのため毎単元では学習課題を設定し、それに向かって学習することで、主体的に読みを深める子どもが育つのではないかと考えた。

本研究では2学年国語科「お手紙」の実践について記述する。今回学習課題として、ベスト「」（かぎかっこ）ショーウィンドウを設定した。その実践についてのあらましを述べていく。研究方法として、自分のお気に入りの本を選ぶことにより、その本の魅力を精一杯伝えようとし、そのために共通教材である「お手紙」ではどんなことを考えないといけないうかを考え、話し合いに活かすことができていた。それは個人でのワークシートに書いて考えるときに自分のお気に入りの本を考えながら、「お手紙」についても考える

成果は今回、学習課題を吟味し、設定することで子どもたちは意欲的に学習に取り組むことができた。

キーワード 主体的 読む お手紙 多読 紹介 ショーウィンドウ

1. 研究目的

国語科では、「問い続け、学び続ける子どもたち」を育むため、「つながり」をキーワードとして研究を進める。この「つながり」とは、言葉のつながり、他者とのつながり、学習のつながりとしている。そこで今年度では、他者とのつながりに重点を置き研究を進める。そのために、一人一人の読みの視点を表出させていく。それぞれの視点の交わるところにずれが生まれ、そのずれを追究する中につながり学び合う子どもの姿がある。その経験が、一面的な視点ではなく多面的な視点をもって読みを深めていく子どもたちを育てていくと考えている。

本研究では、読みを深めるためには子どもが主体的でないと思えないと深まらないと考えている。子どもたちが「面白い」と感じることを学習に活かしていかなければ、学習意欲が向上せず主体的に読もうとするところには至らない。そのため毎単元では学習課題を設定し、それに向かって学習することで、主体的に読みを深める子どもが育つのではないかと考えている。

そのなかで本学級の子どもたちは図書室や学級文庫の本を読んでいる姿を見ることが多い。しかし子どもたちの実態として挿絵だけを見て、文章を読んでいないことが多い。低学年では言葉の意味をまだ理解できていないことがある。それは発達の段階としては、普通ではあるが、今後の読書活動や叙述を元に考えるという活動を進めていくためには、今から文章に注目しながら読みを

進める子どもになってほしい。そのために主体的に読みを深める学習を1年間通して進めてきた。

2. 研究方法

本研究では2学年国語科「お手紙」の実践について記述する。

「お手紙」はアーノルド＝ローベル作「ふたりはなかよし」シリーズの中の話であり、児童にとって身近な生き物であるかえるやかたつむりなどを登場人物にした物語である。ちょっぴりわがままで自分勝手ながまくんと、心優しいかえるくんのほのぼのとした友情を描いた心温まるお話であり、友だちに関心をもち始めている2年生の児童にとって分かりやすく、楽しい物語だと思われる教材である。

そうした物語作品を教材として用い、本実践ではベスト「」（かぎかっこ）ショーウィンドウ（図1）を書いて紹介するという学習課題を設定した。

ここでのベスト「」（かぎかっこ）ショーウィンドウとは、作品の中の登場人物のセリフや会話にスポットを当てて紹介するというものである。紹介する部分については、登場人物のセリフや会話の中から心に残ったことやすてきだなと思うところやいいなと思うかけあいなどを取り上げるようにしていく。会話文にスポットを当てていくのは、セリフや会話、かけあいの中に登場人物同士の友情や思いやり、優しさが含まれていると考えているからである。会話文にスポットを当てて学習を進めることで、登場人物の気持ち

や様子を読み取ることができると考えたからである。

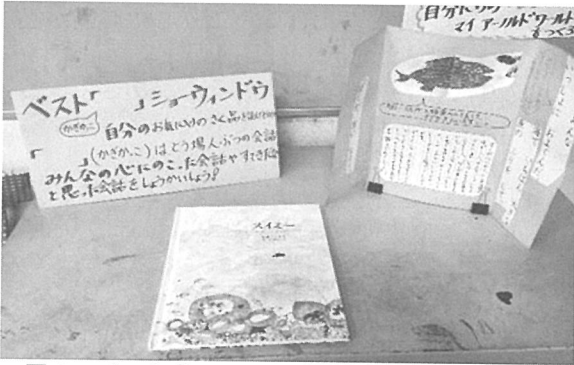


図1 ベスト「 」(かぎかつこ) ショーウィンドウの見本

本単元では、学習課題として自分のお気に入りの作品を紹介するためにベスト「 」(かぎかつこ) ショーウィンドウを書き、紹介する活動を行った。

単元を通して、第一次では、ショーウィンドウの見本を見せ、児童たちのゴールを確認するとともに単元の見通しを持たせる。

第二次では、各場面ごとにお気に入りの会話文を見つけていく。それぞれの場面のお気に入りの会話文の中から一番お気に入りの会話文を選び、それをショーウィンドウに書く活動を行う。その会話文を選ぶためにペア音読で読み進めていく。ペア音読は、ペアで読むことで、かけあいの中にある心情理解につながると考えている。また会話文だけでなく地の文や前後の会話文なども併せて読むことで、会話文のよりよさに気づいていくことができると考えている。

第三次では、アーノルド＝ローベルの作品の中から一番のお気に入りの作品を選びそのお気に入りの作品を紹介するベスト「 」(かぎかつこ) ショーウィンドウを書く活動を行うことでより多読につながると考え設定した。

3. 授業の実際

単元の目標をがまくんとかえるくんの様子や気持ちを、会話文や挿絵などに着目して具体的に想像することができる。【読(1)エ】

自分のお気に入りの場面について紹介するベスト「 」(かぎかつこ) ショーウィンドウを自分の体験や叙述をもとに書くことができる。【読(2)イ】と設定した。

本単元では、音読劇ではなく、読み取りに重点を置きその読み取りを活かしていきけるような学習活動を設定した。それがベスト「 」(かぎかつこ) ショーウィンドウである。『お手紙』

はかえるくんとがまくんの会話文が多く、そのかけあいやセリフ自体に大きな魅力があると考えている。しかしながら会話文だけでなく、地の文の重要性も着目しながら登場人物の気持ちや様子を具体的に想像しながら読むことができることを目指した。

単元の中では、子どもたち同士が言葉をつないでいくことができるように学習を展開していった。言葉をつなぎ学習を進めていくことは、「つけたし」や「ちがって」だけでなく、自身の生活体験から話したり、説明したりしていくことが重要だと考えている。そうした仕掛けを1学期から継続してきた。

また低学年では、言葉だけでなく動作化を入れた音読をしていくことで動きから理由を考えたり意見を発表できたりとする。この動作化を取り入れた音読も継続して行ってきた。そうした活動を経て今回、2年生が親近感をわきやすい『お手紙』を学習することとなった。作風も低学年のような行動、会話が繰り返り広げられ2年生そっくりな部分が多くみられる。

そんな身近に感じられる『お手紙』のお気に入りのショーウィンドウで紹介しようとすることで、より主体的に読みを深めていくことができると考えた。

1時では、単元全体のゴールの確認と各時間の活動を説明した。そこで子どもたちは、学習の見通しを持つとともに学習への意欲高まりつつあると感じた。それは、表情やしぐさだけでなく、アーノルド＝ローベルの他作品の平行読書コーナーを設けていたこともあり、それらの本に飛びついていた様子からも見受けられる。

また『お手紙』は会話文が多い。かえるくんとがまくんどちらが話しているのかが分かりにくいということもある。そこで、かえるくんとがまくんシールをテキストに貼っていき、(図2)一目でわかるように工夫を行った。その結果間違ふことなくスムーズに読み進められることができた。

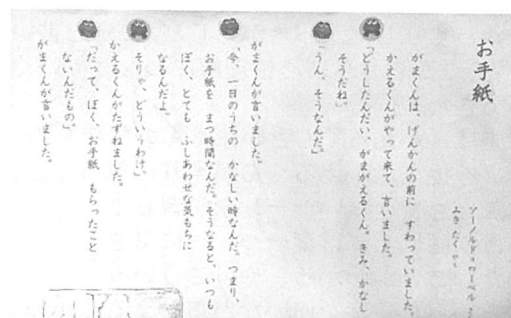


図2 教材文にシールを張ったもの

2時では、挿絵をもとにどんな内容の物語なのかを俯瞰した。この時間においては物語のあらすじを語ることはせずに挿絵だけで、どんな

物語なのかを想像しながら予想を立て行った。しかしながら平行読書の効果もあり、かえるくんとがまくんの友情を語りだす子どももいた。ここでの心情理解は深くせずに子どもたちの想像を広げていった。またそのなかで、どんなシーンがあるかを確認しそれぞれのシーンでのお気に入りの会話文を見つけることも確認した。

3時からは、それぞれのシーンでの読み取りへと入っていく。この時間では、お手紙をもらったことがなくに寄り添うかえるくんを描いたシーンである。このシーンではがまくんのかなしさやかえるくんの思いやりなどを言葉をつなぎながら子どもたちで心情を導き出した。そうした読み取りをペアで音読を行い、心情を表す活動を行った。またその音読を聞き、このシーンでのお気に入りの会話文を選び理由をワークシートに書き込んでいった。

この時間ではK・Rが「かえるくんが、がまくんの気持ちを分かってあげたから」という発言をしそこから子どもたちが言葉をつなぎだした。最終には、M・Rが「自分ならうれしいなー」と発言し自分に置き換え思考することができた。

4時では、かえるくんがおおいそぎでかえり手紙を書き、かたつむりに手紙を渡すシーンである。今回ははじまりから子どもたちがめあてに対して積極的に取り組む姿が見られた。その要因として考えられることは前時で、子どもたちがつながり、実体験をもとに話し合いを行い、自分たちで導き出すことができたからだと考える。そうした経験が子どもは自信となり、次の意欲へとつながると言える。

この時間ではY・Aが1カ月ほど前にあった実習生の例にだしながら学級の子どもに語り掛けることがあり、その様子に子どもたちは、「あーなるほど」と驚嘆していた。かえるくんががまくんのためにサプライズを考えている思いやりやどんな時でも友達のことを考えられるかえるくんのやさしさに気づくことができた。またK・Hはワークシートに「大急ぎで手紙を書いたのは、二人でゆっくりしたかったからじゃない」と書いていた。そこからさらに心情理解につなげていくことができた。

5時では、かえるくんとがまくんの気持ちのギャップを捉え、かえるくんが焦りに焦ってどうすることもできないシーンを学習した。子どもたちは前回以上に言葉一つ一つに気を付け、「いいことがわかる」や「こういうこと？」といった言葉を使いながらかえるくんの焦りやがまくんのすねた様子を話し合いにより考えていくことができた。特にこのシーンでは、サプライズもしたい、けどがまくんのすねているのも見せたくないかえるくんのやさしき

している心情に迫ることができた。またがまくんのすねている心情にも迫り二人の間のもやもやを考えて読み取ることができた。J・Sは「二人の時間が必要なんよ。ゆったりした時間が必要なんよ」と語り、N・Mは、「がまくんは実はこの中で泣いているんよ。それがあきているってこと」と心情を深くまで考えた発言をすることができていた。

6時では、かえるくんが、がまくんにお手紙を出したことを我慢できずに話してしまう場面を学習した。この場面では子どもたちは、今までの学習を踏まえて話し合いを展開することができた。登場人物の二人に寄り添いながら心情を理解しながら読みを深めるため話を聞き、話し、付け足しながら子どもたちだけで、話し合いを重ねた。また挿絵の最初と後で見比べながら表情や様子を取り上げ、この場面ではがまくんは幸せそうだという意見も出てきて、なぜそれが言えるのかを叙述を根拠に話すことができた。その発言を取り上げ、全体で共有化を行うことで、一人一人の読みが深まったと言えるのではないかと。

7時から9時では「お手紙」のベスト「 」(かぎかっこ)ショーウィンドウを作成した。この時、学習してきた各場面から一番のお気に入りのセリフを選び理由を書き、紹介する活動を行った。この段階ではまだ自分のお気に入りの作品で紹介はしていないが、子どもたちは早く紹介したいと発言していた。ここで、次のショーウィンドウを作成するためにどうすれば伝わりやすいかを考えポイントを絞った。

10時から12時までが第3次となり、自分のお気に入りの作品のお気に入りの場面を選びショーウィンドウに書き込む活動を行った。本は手に取りやすいように低い机に置き、その近くに読むスペースを設けることで、子どもたちはいつでも好きな時に本を読むことができると考えた。

(図3 図4)ショーウィンドウを作成し、交流を図ることで、子どもたちからは〇〇さんの本読んでみたいなという発言が出てきており、いろいろな本に興味を持ち自分でほかの本を読むことができていた。



図3 シリーズ作品の展示



図4 本を読むスペースの工夫

4. 授業の考察

まず本実践の主張点は、アーノルド＝ローベルの作品の中から好きな作品を選び、その中の好きな会話文をベスト「 」(かぎかっこ)ショーウィンドウとして友達に紹介しようとする事で、主体的に読みを深めていこう。である。そこで本実践ではこの主張点が授業において適切であったのかを述べていく。

本研究では「お手紙」の第6時を取り上げている。まず自分の好きな作品を選びその中のさらに好きな場面を紹介する活動を設定したことで、子どもたちの学習意欲は上がったのではないと言える。第2次の終わりには子どもたちから「早くいろんな本読んで紹介したい」や「国語の時間まだかな」といった声が多く出てきていることからそう言えると考えている。

また自分のお気に入りの本を選ぶことにより、その本の魅力を精一杯伝えようとし、そのために共通教材である「お手紙」ではどんなことを考えないといけないのかを考え、話し合いに活かすことができていた。それは個人でのワークシートに書いて考えるときに自分のお気に入りの本を考えながら、「お手紙」についても考える場面があり、その様子からも主体的に読みを深めようとしていたのではないと言える。

5 成果と課題

成果は今回、学習課題を吟味し、設定することで子どもたちは意欲的に学習に取り組むことができた。また意欲的に取り組むことで、読みを深めていき、やってみたいと思うようになったことは成果であると言える。

また本研究では、毎時間少しずつワークシートに書き込み完成させていくことで、学習課題への飽きにつながらず、学習欲の持続にもつながった

と言える。子どもたちの授業の様子を見てみると「お手紙」という物語の世界に浸り、楽しみながら学習を進めることができたことは大きな成果だと言える。

しかし一方で課題としては、話し合いを進める上で、実体験や叙述をもとに話し合いを進めたが、自分から意見を発表できる子どもばかりでの話し合いになってしまう展開があり、全員が共通に問いを持ち学習課題に向かうことができなかった場面もあった。またワークシートの工夫が特に必要であり、キーワードの準備やどんなことを考えれば課題に向かっていくのかを細かく設定することができていなかったため、数名には声かけやサポートが多く必要になってしまった。私自身の課題でもあるが、そうした部分を細かく設定することで全員が学習課題に向かうことができると考えている。それを達成するためには、学習支援や学習課題の精査が必要になってくる。そうした部分を今後の研究での課題とし、一層努力していきたい。

参考文献

2017 「和歌山大学教育学部附属小学校紀要 第四十集」

2011 「小学校学習指導要領解説編 国語編」東洋館出版社

文部科学省ホームページ 2017 1・13
第1 国語力を身に着けるための国語教育の在り方
www.mext.go.jp/b_menu/shingi/bunka/toushin/04020301/007.htm